

資料と通信

NPO 法人化した FENICS の挑戦——フィールドワーカーである市民を中心に、大学の外で学問を基に知的活動をする

椎野 若菜*

I はじめに——FENICS とは

FENICS は、フィールドワーカーが中心となって、分野を超えたフィールドワーカーのネットワークを推進し、フィールドワークから各人が得ている経験知や発見を広く共有し、新しい何か生み出すために設立した NPO 法人である。2015 年 1 月 11 日に NPO 法人として認証され、1 月 22 日に登記、設立したばかりだ。

フィールドワーカーは、つねに経験を積極的にとらえようと努力し、歩き方／生き方、研究の方向性を模索する。身体が震えるほどの新しい発見や喜び、経験によってはすぐにポジティブにとらえきれなくともやがて克服し、つらかったことも何とかネタにし次のステップを踏み出せるのがフィールドワーカーだ。私たちは、このグループを Fieldworker's Experimental Network for Interdisciplinary CommunicationS、略して FENICS、と名付けた。

かつてフランス文学の桑原武夫や、動物学から出発し生態学、民族学や情報学などへと関心を広げていった梅棹忠夫、2015 年 7 月に亡くなった哲学者であり政治運動にも身を投じた鶴見俊輔らは、専門分野がちがうからこそ刺激を与え合い、それぞれの活動を展開していた。鶴見の思考や活動のベースには京都大学人文科学研究所に在籍した際の人間関係があるのはよく指摘されることだ。梅棹は、鶴見が戦後すぐに立ち上げた雑誌『思想の科学』の出版母体であった思想の科学研究会を支えた人でもあったが、この研究会は研究者のみに閉じない市民に開いたものであった。鶴見はその

活動について常に「サークル」活動の在り方として考え議論してきた。1956 年『思想の科学』7 号¹⁾で「集団の組み方について」と題した特集を組み、その巻頭論文で鶴見は「サークルは、まず市民であって次に思想家・芸術家であるような兼業思想家・芸術家の集団であり、このゆえにサークルは、マスコミとか大学とはちがう仕方で日本の地域社会の状況と深くむすびついている」[鶴見 1956: 32] と言っている。少々古い時代の引用かもしれないがこの鶴見の言は、FENICS のロールモデルとして、今に至り活動が続く、思想の科学研究会を喚起させる。FENICS の立ち上げメンバーが共有する思いは、大学の外でも学問をベースとして知的活動をし、関心事が共通するあらゆる立場の人びとを巻き込んで実社会とうまくつながり、新しい関係性、自由な発想や表現を生むことをめざすということである。

桑原、梅棹、鶴見、といった巨人たちとは比べものにはならないが、FENICS という活動体も、異なる分野だからこそ、接触しぶつかり、多くの刺激を受け、協同し、新しい発想やモノが生まれることを期待したプラットフォームを生み出そうという狙いを共通してもつ。現在 FENICS の活動の最初の柱となっている、古今書院から 15 巻の企画で昨年より発刊の始まった『FENICS 100 万人のフィールドワーカーシリーズ』は、さまざまな専門でフィールドワークを必須とする人びとを 200 人ほど集め、執筆陣が構成されている。

II たちあげまでの経緯

私自身が異分野の人たちと出会い始めたのは、ケニアにおいてである。幸いにして、私がフィールドとしたケニアには、日本学術振興会のナイロビ研究連絡センター（以下、ナイロビ学振）があった。今年で初めてアフリカに足をふみいれてからちょうど 20 年目になるが、1995 年の 2 月に初めて渡航してから、ケニアをフィールドとする研究者に多く会うことができた。この最初の年だけでも、当時駐在員だった生態人類学の曾我亨さんと当時調査に入っていた河合香史さんを筆頭に、

* 東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所 E-mail: wakanatokyo@gmail.com

いまは亡き昆虫学の八木繁実さん、霊長類学の山極寿一さん、考古学の調査をしていた石田英実先生を頭としてその調査隊の中務真人さんや國松豊さん、清水大輔さん、そのうちも農学者や政治学者、教育学者、植物学者、地理学者などさまざまな方に出会い、食事をともにするなかで多くを学んだ。学会などで会ったとしても緊張し挨拶程度しかできない先生方と、まさに堅苦しくない場で、しかもフィールドへの玄関であるナイロビで会ったというのが重要だった。分野の違う方に自分のフィールドを案内したり、訪ねたりすることもあり、フィールドを共有して違うものを見る、という体験をわずかながらして非常に興奮した。

しかし、やがてナイロビ学振というのが、特殊な場所であることもわかってきた。どの人類学者もこんなことを経験しているわけではない。とりわけ院生時代は、自分の所属する大学院だけに出入りすることが多い。若いうちにこんな出会いがないとは、なんと経験が異なることか！またしばしば耳にするようになった学際研究、文理融合研究の内容も理系主導の大型プロジェクトが多く、その参加した経験者に聞いても、人類学者はとりあえず文理融合という名のもとにメンバーになっていることが多かった。そこで、フィールドを共有するからこそ共通のテーマを発見し、意気投合して協働したくなる小さな共同研究を生む場が必要なのは、分野が違うからこそ新しいことが生まれるのでは、と思い始めていた。

そのうち任期付きではあったが、東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所(AA研)に職を得てからは、この構想を実現することができそうな時機をうかがっていた。そのころまさに同じ「フィールドワーカー」であるという共通点だけで目からうろこが落ちるような話を沢山聞くことができたのが、南極や北極に行っているフィールドワーカーの話だった。

彼らと出会う前の私は、社会-文化人類学の調査スタイルらしく、ある村落を調査地と定めて息長く詳細に調査を行う、いわゆる「四畳半のフィールドワーク」を、女である故のハンディやおそらくメリットを客観視しつつ、人間関係の持ち方について自分で判断して振る舞い、関係を築き、繰り返す疾病に耐え、何度も失敗を繰り返しながら

自分で工夫して乗り越えてやってきたつもりだった。しかし大自然と対峙し、ひとつひとつの自分の判断が命にかかわるフィールドワークをしている自然科学者のもつ緊張感にふれ、自分の奢った気持ちに恥ずかしさを感じた。

また、彼らと話していると、関心をもつ事柄、こだわり、フィールドまでの道程、装備、すべてが異なり、質問が次から次へと、絶え間なく続いた。どうやら、お互いがそうした何ともいえない刺激を得ていたようで、会うたびに新しいことを楽しく生で聞くことに対してともに充足感を得ていた。そして、分野が異なってもフィールドワーカーである人びとのネットワークをつくりたい、という思いを共有した。そのために集まると、時間を忘れて議論し続けた。そうしてまず生まれたのがFieldnetである。この名前には、フィールドに関わる人をネットワーキングしたいという思いが込められた。しかし、紆余曲折があり、着想から4年後の2012年3月、Fieldnetの立ち上げメンバーは解散することになった。

この解散は、まさに私たちの新しい出発であった。活動をしつつもややもやと感じていたこと——冒頭にふれた鶴見が立ち上げた「思想の科学」とはだいぶ異なり、大学というアカデミズムの中心でやろうとしていたために、社会のなかでは閉じたコミュニティになっていたことから卒業し、私たちはヒエラルキーのない、大学の枠、職業の枠を超えた個々人の関心にもとづくネットワークをめざすことになった。世の中には、研究者以外にも日本の外の世界、あるいはフィールドワークに関心をもっている人びとは意外といるものである。ただ研究者がアカデミズムのなかに閉じており、出会う場が少ない。くわえて文化人類学はとりわけ、近年はアカデミズムのなかでさえ、あまり知られているとはいえない。努力してプレゼンスを高めねば、研究の面白さも知ってもらえない。一般に人類学の読者が少なければ、自然と出版界でも立場が弱くなる。文化人類学を専攻する学生も少なくなる。そしてそれは、大学院を終えた人の就職先が限られてくることとも大いに関係してくるはずだ。

Ⅲ FENICS 始動

フィールド研究をしている立場としては、アカデミズムからフィールドへのなにかしらの還元について考えるのは当然であろう。他方、NGOや政府機関、ビジネスを展開する商社で海外をベースとして活動してきた人が自らのしていたことをアカデミズムのなかで確認、あるいは展開するために大学院に来るようにもなった。もう10年以上も前からそうした経路もあるのだが、日本ではまだ、とりわけ博士の学位をとってから一般企業等への就職の道は開けていない。そこで当面の対策としてまず、人類学というアカデミズムに閉じず、フィールドを共有するほかの学問分野やそのほかの業界と交流する場をより活性化させていくことが必要となってくる。

現在、FENICSに登録している人びとの専門は、文化人類学、霊長類学、社会学、環境社会学、医学、国際保健学、考古学、水中考古学、気象学、人文地理学、自然地理学、雪氷学、地球化学、植物学、動物学、地域研究、海洋生態学、農学、熱帯農業生態学、進化生物学、古生物学、建築学、メディアアート、民族音楽学などである。また職業は大学や博物館、研究所に在学、勤務する研究者のほか、ミュージシャン、アーティスト、作曲家、作家、建築家、編集者、書店店主、デザイナー、TVディレクター、写真家、探検家、医者、商社マン、会社員などさまざまだ。さらに、携わっている／関心のあるフィールドはアフリカ、オセアニア、アジア、ヨーロッパ、そして日本、あるいは山岳地帯、地下、氷下、洞窟、海洋、河川、極地とまさに世界のあらゆる場所に広がっている。

フィールドの音、匂い、食、人びとの知などから何か得たいアーティスト、作家、マスコミ関係者など、それぞれの専門でフィールドに関わる人、関わりたい人は世の中にけっこういるものだ。ここでいう「フィールド」とは、基本はフィールドワークのフィールドであり、調査地域であるが、フィールドワークの思考を礎にした専門や極めたい、思い入れのある関心事、ビジネスといった分野が関わる地域にまで拡大することができるだろう。立場が異なるからこそ、その視点や思考から

発見を得ることができることから、互いに研究や作品、ビジネスなどに繋がる何か新しい発想、モノ、マッチングが生まれることも大いに期待できる。交流しなさい、融合しなさい、と上から言われてもできることではない。学問や新しい発想は、ゆるやかな強制されない場と関係性のなかで新しく想像・創造されるのだ。そのための仕組みを、私たちは考えている。ただ、メーリングリストの人数を増やしても何もうまれない。議論したり、交流したり、ともに何かを共有する機会、場が必要なのだ。重要なのは、そこでの関係性にヒエラルキーがなく、研究、関心のある事項という共通点で話ができ、共有できることである。

Ⅳ 『FENICS 100万人のフィールドワーカーシリーズ』

アカデミズムに閉じず、人とどうつながり、何かを生む仕掛けをどうつくるか。集まって刺激を受けあわなければ何も始まらない。とはいえ私たちのほとんどがアカデミズムのなかでしか生きてこなかったもので、初めに考えたのが本づくりである。人があまり本を買わなくなったこのご時世ではあるが、イベントだけではその場で知り得た情報や知的興奮もある程度は消えてしまう。ネット上だけでも、情報過多で埋もれてしまう。そこで、オーソドックスな方法だが簡単に消えない紙媒体にこだわることにした。

そうしたわけで、世界中のさまざまな地域、テーマをあらゆる分野のフィールドワーカーの視点で扱うフィールドワーカーのためのシリーズを発刊することになった。立ち上げメンバーの1人の、大学院の先輩が古今書院で編集者をしており、この企画に積極的に賛同してくれたのである。自然地理学出身の関秀明さんというその編集者は、Fieldnet時代から、われわれの活動をみてきてくれたのだ。最終的に全15巻という構想となったこのシリーズは、関さんが『100万人のフィールドワーカーシリーズ』と名付けてくれた。

分野をまたがり多くのフィールドワーカーが執筆する、一般読者も眼中にいたシリーズとしては、おこがましいかもしれないが、私の生まれた1972年に刊行が開始された『朝日講座 探検と冒

険』(全8巻)以来ではないだろうか。第一巻の巻頭に、梅棹が次のように書いている。「これは、団体観光旅行者のためのものではない。それ以外の、日本人すべての海外活動者にささげられているのである。さまざまな分野にわたって、海外で、身をもって新鮮な何ごとかを体験しようとのぞんでいるすべての人たちに、この講座はささげられているのである。その人たちのために、できるだけ実際的で有用な入門書・参考書として役だつことを念願して、この講座はつくられているのである。場合によっては、団体観光旅行者にとってさえ、おおいに利用価値があるように、この講座は構成されているつもりなのである」[梅棹 1972: 13]。『第一巻 アフリカ』の執筆者には、梅棹のほか端信行、石毛直道、米山俊直、日野舜也、富田浩造、桑原武夫、編集委員には本多勝一や泉靖一らの名がつけられている。

この講座シリーズの出版から40数年たったからの私たち FENICS のフィールドワーカーシリーズの企画も、ねらいは『朝日講座 探検と冒険』とほぼ同じとあっていい。朝日講座のキーワードは「探検 explore」と「体験」である。本シリーズは「フィールドワーク (カー) fieldwork (er)」である。ただフィールドワーカーをとりまく環境や抱える問題はこの40数年で大きく異なっているため、フィールドでの体験にもとづく方法論を中心とする巻と技術に焦点を当てた巻に分け、テーマを15にしぼった。前者についてはフィールドで困難に直面したときに、ほかの人がどう災いに対峙し解決していったかの体験談から教訓と勇気をもらい、後者はフィールドにも持って行って役立ててほしい、という思いをこめてシリーズの構想をした。具体的にはたとえば、4巻の『現場で育つ調査力』は、近年、多くの大学においてフィールドワークに引率する科目が増加し、フィールドワーカーの教員がツアーアテンダント、コンサルタント、教育、すべてを一手に引き受けねばならない機会が増えている。ほかの大学のケースから学べることはないか、互いの情報を共有、交換する発端となればと企画した。6巻の『マスメディアとの交話』の企画の目論見は、たとえばメディアにたいしどのような態度、関係をもつたらいいのか、思考錯誤するフィールドワーカーのために、またメディ

ア側からの立場も交差させ、今後の関係性について考える端緒とすることを考えて編んでいる。いずれも、分野を超えた著者が執筆しているからこそ、学びがあるのが魅力である。あらゆるフィールドワーカーのための、フィールドワーカーになりたい人の、フィールドワークに関心のある人たちのためのシリーズだ。ラインナップは次のとおりである。

- 第1巻* 『フィールドに入る』 椎野若菜・白石壮一郎 (編)
- 第2巻* 『フィールドの見方』 増田研・梶丸岳・椎野若菜 (編)
- 第3巻 『共同調査のすすめ』 大西健夫・椎野若菜 (編)
- 第4巻 『現場で育つ調査力』 増田研・椎野若菜 (編)
- 第5巻* 『災害フィールドワーク論』 木村周平・杉戸信彦・柄谷友香 (編)
- 第6巻 『マスメディアとの交話』 椎野若菜・福井幸太郎 (編)
- 第7巻 『社会問題と出会う』 白石壮一郎・椎野若菜 (編)
- 第8巻 『災難・失敗を越えて』 椎野若菜・小西公大 (編)
- 第9巻 『経験からまなぶ安全対策』 澤柿教伸・野中健一 (編)
- 第10巻 『フィールド技術のDIY』 的場澄人・澤柿教伸・椎野若菜 (編)
- 第11巻* 『衣食住からの発見』 佐藤靖明・村尾るみこ (編)
- 第12巻 (2016年5月出版予定)
『女も男もフィールドへ』 椎野若菜・的場澄人 (編)
- 第13巻 (2016年3月出版予定)
『フィールドノート古今東西』 梶丸岳・丹羽朋子・椎野若菜 (編)
- 第14巻 『フィールド写真術』 秋山裕之・小西公大 (編)
- 第15巻* 『フィールド映像術』 分藤大翼・川瀬慈・村尾静二 (編)

(*は既刊)

本シリーズの執筆陣に関心があるなら、FENICSの会員になれば彼らと関わるイベントや具体的な質問をする機会を得られる、という連動性をつくった。これまで会員になった人はシリーズの読者であったり、イベント参加者であったり、あるいはネット上で存在を知って、などというきっかけがある。またフィールドワークの地域や新しい手法を探している人にとって、たとえば「水中でのいい撮影方法を知りたい」「空撮の仕方をもっと具体的に知りたい」などと思ったら、FENICSのウェブサイトで会員登録をし、その執筆者により詳しいことを聞けるようネットワーク内で連絡がしあえる仕組みになっている。

研究者の会員向けには、シリーズの本をフィールドワークの授業で使う際、紙面にない情報、学生からの質問等をメールやSNSで執筆者に聞けるようにしている。また教育の目的であれば、基本的なフィールド情報や執筆内容についての写真のパワーポイント・ファイルを互いに貸し出すことができるよう、ウェブのwiki上にアップロードするようにしていく予定である。これは既に発刊されている11巻で実施している。

V 現在までの活動

FENICSは、2014年の1月に13巻『古今東西フィールドノート』にちなんで、フィールドノートサロンの開催をもって始動した。そろそろ2年目をむかえるが、NPO法人として認められてからは、1年経ったばかりである。

当面の活動の柱となっているのが、『100万人のフィールドワーカーシリーズ』の発刊とその編集過程、また発刊記念などにちなんで研究会、イベントの開催、また「フィールドワークとキャリアアップ、子育て、介護などとの両立を考えるアンケート」の実施である。

「一般、別の分野の人に、わかりやすく自分の研究を伝える」というのがイベントというライブの大きな目的である。日本においてわかりやすく語るとは、聴衆の多様性をみながら、日本と自らのフィールドを対比させ繋がりをもち、やさしい言葉で語れるか、ということだ。これがうまくできれば、とりわけ人類学については、サポーター、

ファン／読者、スポンサーの拡大が期待され、プレゼンスの向上につながる。これは人類学者のさまざまな場面での雇用拡大にもつながっていくと信じている。数年の調査を経て博論を執筆できる段階の人は、アウトリーチ活動に加わるべきではないか、と私たちは考えている。一般の、あるいは異分野の人の質問は、シンプルでありかつ、核心にせまったものであることも多い。限られた時間で難しい言葉を使わずに、学術用語もやさしく説明しつつ話すという訓練が必要だ。そういう場にさらされる経験の積み重ねは、講義の仕方にもつながっていく。

これまで2014年の始動より2015年度までで東京にて8回、京都にて2回、計10回のイベントを開催した。これまでのイベントはさきにふれたフィールドノートの巻のサロンが3回、5巻『災害のフィールドワーク論』発刊記念シンポジウム、11巻『衣食住からの発見』の話者の発表、12巻『女も男もフィールドへ』にちなむサロンが3回、またシリーズ発刊記念とFENICS始動のキックオフイベント、そして2巻『フィールドの見方』のシンポジウムを東中野ボレボレ座にて、総会イベントが開催された。

また、公益財団法人下中記念財団と、映画製作や配給、映画館運営を手がけるボレボレタイムス社の共催による、1950～80年代の民族誌映像を中心とする映像アーカイブ「エンサイクロペディア・シネマトグラフィカ」(ECフィルム)の連続上映会の企画[川瀬 2013]にも協力している。設定されたテーマに関しFENICS会員が自らの映像作品や多様な調査映像を持ち寄り、ゲスト出演者として参加するかたちである。当イベントへの協力は、これまで3回、今後も継続していく予定である。

こうした活動のなかでなによりうれしいのは、これまでサロン開催により、発表者と聴衆であった研究者が出会い、小さな共同研究が始まっていることである。分野の異なる者が交流することによる刺激と、共同研究者同士のマッチング、これこそ私たちがイベント開催でめざしていることである。

またこれらのイベント活動での発見は、学会で話し慣れている人でも、意外と一般向けとなると、すぐにはうまく話せない人もいることであった。

自分が登壇するイベントに入場料が設定されることに驚き、たじろぐ人もいた。運営側の事情からいえば、大学の外で民間のスペースを借りるには場所代を要するため、聴衆から入場料をとる必要がある。しかしそれは、支払った金額に見合った一般の聴衆の参加を見込めなければならない、という緊張感があることを意味する。近年、各大学が無料で市民講座などを行うなか、有料のFENICSイベントに来てもらうにはイベント参加の充実感が問題になる。

主催者側として会場のオーナーなどからのコメントも勉強になる。こちらが示した広報の素材について、一般の人にはわかりにくい、敷居が高すぎるといった批判、あるいはこうしたら、というアドバイスはちょっとしたことで参考になった。またどうやら、一般には同じような話の内容でも、大学の教室と、書店のスペースやカフェ、といった場では聞きやすさがかなり異なるようである。大学の教室は、教壇と学生の机の配置など、その場自体がヒエラルキーを想定して作られているからだ。

とりわけ、ドキュメンタリー映画を多く上映する映画館ボレボレ東中野のイベントスペース、ボレボレ座で開催される「ECフィルム」の連続上映会への協力経験からは、フィールドワーカーの話を求めている人たちが世の中にはいる、という実感を得られた。この場を通じ、さまざまな職業の方が会員になってくれている。新しい仕事や人との出会いから始まるのは、フィールドでも日本においても同じである。FENICSメンバーがゲストの際、FENICSシリーズだけでなく、5,000円以上もする博士論文をもとにした著書が一度のイベントで2冊も売れたときは驚いた。

また、私たちが心がけているのは、イベント・スタイルとして、子連れでの参加を歓迎していることだ。話す側も慣れないかもしれないが、自然な形として子どもがまわりで走り回っても遊んでおしゃべりをしていても、話者は話し続けるのだ。子どもがいるから、イベントや研究会に参加できないことだけは避けたい。

VI 現時点での課題

1 運営上の課題

シリーズ15巻の執筆陣はすでに確定している。だが、これで完結ではない。分野を超えたネットワークであるため、人類学者ばかりに依頼することはできなかったが、まだつづいて出版の機会も準備されている。全15巻のなかにはTVディレクターや新聞記者、会社員の執筆者も数名いるにすぎない。分野の異なる人々の原稿をまとめる編集作業に労力を要するのではあるが、今後は人類学者をはじめ、より広くさまざまな立場の人をいれていきたい。

事業のひとつとして現在、シリーズの著者たち、そしてイベントやシリーズ読者として会員登録してくださった方々にメールマガジンを配信しており、228名が登録している。年会費は多くの人に入ってもらうため、NPO法人としては1,000円と格安に設定した。だが登録者の数に比べて、会費を払う正規会員は少なく、賛助会員（1万円）はまだゼロだ。今後は活動への理解をもとめ、企業などにもかけあい、そして若手研究者の支援も夢みている。

また現在は、要望があるにもかかわらず、イベント開催地が東京に偏りがちであるため、地方での開催を担当できる企画者を全国に増やしたいと考えている。コアメンバーはどこへでもかけつけ、地方での企画をサポートをする準備はできている。

2 フィールドと日本の懸け橋

NPO法人としての立ち上げ理由のひとつに、フィールドワーカーがフィールドへの自らの研究活動の還元として、現地との関係を日本と何かしらの形でつなげたい場合、このFENICS内のネットワークを使って同じ地域での参加者を募ったり、補助金申請などができるようにNPO法人としての回路をつくるという事項があった。まだ活動は始まったばかりだが、これもひとつの大きな設立の動機である。ほかのNGO、NPOと連携し、すでにあるノウハウを学びつつ、合理的なネットワークをめざしたい。

V むすび

さいごに、現時点での反省は、シリーズの出版が当初の計画より1年ほど遅れており、早く原稿を仕上げた執筆者を待たせていることである。若手の業績になるようにと依頼しているにもかかわらず、申し訳なく思っている。実は企画を提案した半年後に私が出産、見舞いに来てくれた11巻の編者2人と病院で打ち合わせもし、その後も決して休んでいるわけではない。が、出版時期の計画が甘かったことは確かだ。こうした、個人の経験とFENICSの活動を通じ、発見も多くあった。活動のなかでも大きなテーマのひとつである、フィールドワーカーと妊娠・出産・子育て・介護についての問題は、また別の機会に問題提起したいと思う。

さきにふれた『朝日講座』にしても、『思想の科学』にしても、シリーズ、定期刊行物は半世紀近くたったいまでも後輩に刺激を与えている。私たちがも学問を主軸におきながら、実社会との関係性をつねに考え、開かれた活動していきたい。

FENICSの運営は、個々人の得手を結集して可能になっている。ご関心をもたれたら、ぜひこのFENICSの活動に加わっていただきたい。詳しくは、ホームページを参照してほしい (<http://www.fenics.jp.org/>)。

注

- 1) ちなみにこの号には川喜田二郎が38歳のときに書いた「パーティ学の提唱——探検隊の教訓から」という調査隊のチームワークについての興味深い論考が所収されている [川喜田 1956: 68-82]。いまもなお、読み応えがあることが面白い。この時点ですでに、戦後の日本の在り方との比較も言及されているが、現代も研究者が協働で何かすること、とりわけ学際的な活動をする際の問題や課題はあまり変わっていないのかもしれない。

参考文献

梅棹 忠夫

- 1972 「朝日講座『探検と冒険』について」『朝日講座 探検と冒険』1、朝日新聞社(編)、pp.12-21、朝日新聞社。

川喜田 二郎

- 1959 「パーティ学の提唱——探検隊の教訓から」『思想の科学』7: 68-82。

川瀬 慈

- 2013 「アーカイブ映像の創造的活用に向けて——エンサイクロペディア・シネマトグラフィカを事例に」『民博通信』141: 2-7。

鶴見 俊輔

- 1959 「思想の発酵母胎」『思想の科学』7: 30-39。